

メモしておきたい光る言葉がいっぱいでした

E&C プロジェクトが活発に(楽しく)活動されていたころ、大阪ボランティア協会でも話題になることが多かったことから、シャンプーのボトルやお札に印がついた頃は、「すごい!」と、その広がりワクワクしていたのを思い出しました。

そして、偶然後藤芳一先生と出会う機会があり、「共用品という思想」を斜め読みして、デザインを標準化することの意義や、これがものづくりの力になっていくことなどをなんとなく感じていたところです。

星川先生の講義で、トミーから始まった思想と共生社会への理念をお聞きすることができ、デザインがさまざまな力を持っていることを、あらためて感じました。

地域活動に関わる場面がある一人としては、杉並区のまつりの話し合いが、「そうか、最初からみんなで話し合えばいいんだ」となった要因はどこになるのだろうと関心を持ちました。私の知る限りでは、自治会長さんら高齢男性のリーダーたちは、会議は情報をトップダウンでおろすものと思っていて、話し合うことが苦手なことが多いからです。

世代が更新され少しずつ変化しているものの、担い手が少ないことや若い世代に余裕がないこともあり、なかなかこの壁が越えられず苦心することが多いので、どこに秘訣があるのだろう?と考えてしまいました。

E&C プロジェクトから共用品推進機構に組織化されていったこと、財団法人として個々の製品開発でなく調査研究や広報に展開していったことも興味深かったのですが、エピソードの中に、「これはメモしておこう!」と書き留めた言葉がたくさんありました。

「ほめる方が人は動く。外部からほめられると刺激になる」

「“片手で使えるもの展”のタイトルにしたら人がたくさん集まった」

「不便さ調査でなく良かったこと調査を提案したら大反対にあったが、やってみたらあたたかい雰囲気があった」

「上下関係や無関心、思い込みが邪魔をしている」

「人がお金を出すのは感動したときだけ」

等々です。

資料が盛りだくさんで追いつけておりません。このままでは次回講義の日が来てしまいますので、遅ればせながら先生へのお礼の気持ちをお送りします。

ありがとうございました。

